

拜啓 寒さも本格的になつてきました。御無音にのみ打ち過ぎ恐縮に存じます。には御健勝のことと存じます。又平素は

さて、突然お手紙しますのは、次のように誠に御迷惑極まるものですが、御高配いただければ幸甚です。

事の起りと申しますのは、去る十二月十五日、東寿司本店を經營する山稜会員、横井利彦氏宅で、ヒマラヤについていると話し合いがしたいから是非出て来てほしいという知らせを受けとり、何事ならんと出かけたことにあります。

席には、名大教授須賀太郎氏、日比野進氏、芝崎陸奥夫氏、加倉井爾之氏、三重県山岳連盟会長伊達忠雄氏、それに名大山岳会の学生若干名と、岩稜会員（これは山稜会員石岡君が昭和二十年に創設した会です）の幹部等（井上靖の「氷壁」魚津のモデルになつた石原君も来ていました）合計二十余名がつめかけ、部屋周辺に張りめぐらされた別紙(イ)の記事があり、何となくものしい空気でした。その人達の説明は次の様です。

「来る年も来る年も、ヒマラヤを目標に懸命のトレーニングを重ねてきた我々は、昭和十九年時節到来とばかり、名古屋大学遠征会の名称でもつて、勝沼総長を委員長として盛大に発会式をあげ、新聞にも大々的に発表され、募金運動にも着手したが、結局マナスルとの競合などのために中止のやむなきに至つた。

しかし、今やマナスルも完登されたので、本年四月、今度こそはという決意で再び立ち上つた。問題は、かかつて資金にある。

しかし、産経幹部の方も実現に努力していただいたが、十月の重役会議で保留となつた。一方、当時、別に朝日新聞津支局長から誘いがあつたので、別紙(ロ)の依頼を朝日新聞に行い、名大法学部長信夫清三郎博士もこのため上京していただいたりしたが、現在これも見込みがない

ようである。

要するに、新聞社に全額負担を依頼することは無理であると感じるに至った。

ここで我々は、独力で募金を開始する必要があるためである。ここに於いて我々は、取り敢えずあらゆる山行を中止し、その費用を蓄積するとともに、広く社会の御支援を求めることになつた。しかしながら、ヒマラヤの費用（別紙計画書のとおり）を集めることは決して容易な事ではない。

一方考えてみるのに、元来我等は八高山岳部の精神をもつて成長してきたのであるから、この計画を、単に名大山岳部、岩稜会の計画としておくことは不自然で、当然母体である山稜会に加つていただくべきではないかと考え、その点をお願いすべく、今回山稜会の名古屋在住の方々に御多忙にもかかわらずお出でをお願いしたのである。「というわけです。

私達は過ぎ去りし昔のことをふりかえり、又、今この雰囲気におかれた自分達を眺めつつ、大きな感慨をもつて約二時間あれこれ話し合いました。

かつて私達の熱情を湧かしひたすらに山に登つた八高山岳部は今その姿なく、私達はただ山稜会という後続のない根なし草のようなものにかまつているだけです。それもお互いに年老い、又仲間も年毎に減つてゆきます。おそらく今後とも我々の情熱をかきたてるようなよすががとてなく、又登山界の進展に寄与することもなく、ただ往年をしのぶにすぎない有様で淋しいといえれば淋しい限りです。

しかしながら現実をみれば、私達がつくりあげた八高山岳部の伝統は決して消滅したわけではなく、それは私達と校舎を同じくする名大山岳会員の中に、又皆様も既に御承知と思われますが、昭和二十二年七月、横尾の岩小屋から眺められるあの屏風岩のスカイラインを完登し、当時日本人の目に映じたスポーツ界の世界十大出来事の一つに数えられたり、朝日新聞編集纂の戦後重要出来事中、登山界での殆んど唯一の存在として大きく評価されたりし、現在にい

たるも、第二登を記録しない輝かしい登攀を行つた山稜会員、石岡君（名大第一回卒）が創設養成し、最近は「氷壁」のモデルとなつて有名な岩稜会（会員五十名とのこと）の若人の中に活々と脈打つて見られるのが見られます。彼等は文字通り我等パイオニア精神を受け継ぎまつしぐらに山に打ちこみ、至難のバリエーションルートを次々に開拓しています。名古屋在住の私達は、彼等に接する毎に血をわきたたせている状態です。

私達は、今彼等の計画を聞き、その実現性ある努力を知り、かつ彼等の願いを聞いて、私達もこの計画の実現に出来るだけの力になつてやつたらと感じたのです。私達はもしもこれが実現すれば、語り草が一つ増え、何となく心がはればれするのではないかという気がするのです。その昔、覇者のような気分で街をカツボしたその地から、ナンダゴツト、マナスルに続いて、ヒマラヤに第三の灯をかかげにゆくことは努力する甲斐のあることだと考えるのです。しかしこれは雰囲気や圧倒された現実ばなれのした単なる感傷でしょうか。たしかに我々といえども、現下の不況の中にあえいでいる一人ですが、考えてみれば、山のことと最近これといつたこともしなかつたことでもありませんので、この際彼等の願いを出来るだけきいてやつたらと話し合いました。それも「単に山稜会の名を貸すのみならず、計画の実現のために先輩にふさわしい努力をしてやりたい」と話し合つたのです。

しかし私達は、彼等の申入れの返事には、ともかくも山稜会の主力をなす東京のメンバーに相談してからということとで延期しました。

それについて、石岡君が上京して皆様に詳細に説明、お願いにゆくといつていますので、とりあえず石岡君にあつてやつていただく機会を、たとえ一時間でも皆様の中をつくつてやつていただきたいと考え、私達が十五日の雰囲気から受けた感想を附してお願いする次第です。なお、その機会は十二月二十二日夕方から二十四日まで位の間にお願ひしたいとのことです。場所、時間については、石岡君が二十二日（日）の夕方竹内氏宅へ電話しますので、そのと

き伝えていただければ幸いです。
以上、突然且つ御迷惑なお願いで恐縮ですが、どうかよろしく御高配の程お願いいたします。

昭和三十三年^{十一}月十八日

殿

藤	谷	横	大	彦	梶	近	熊	下
本	本	井	倉	坂	山	藤	沢	郷
	光	博	辰	与	正	素	正	次
			三					郎
武	典	一	郎	孝	雄	生	夫	八

敬具

この書簡は、西脇氏他昭和十四年卒までの東京在住の十二名の方々に送付しました。
又別紙については、部数の関係から、西脇、桑田、竹内の三氏にのみ送付しました。